慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	露西亜及露西亜人
Sub Title	
Author	広瀬, 哲士
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.4 (1910. 10) ,p.467(99)- 474(106)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101000-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

如きは茲に計入しないのである。此の如き錯覺とは、例へば目に於て誰しもなす所の誤つた測定、即ち同一の長さでも垂平線は長く見え、垂直線は短く見えるといふ事や、又對照されたが爲めに生ずる色の變化のやうなものである。錯覺に於ける根本的の精神物理的特徴は同化作用（アッシミラチオン）といふものである。即ち或る一つのものを他のものと速斷するのである。從つて茲にいふやうな異常にして奇異な錯覺は是幻覺的性質を帶びた同化作用であるといふ事が出來る。而も同化作用であるからこは又初等の聯想作用である。之は通常錯覺が前行する所の表象の中の一定のものに何等の論理的關係なしに起るのに徴しても判明するのである。即ち若しも覺官的中樞の興奮性が增進された結果として幻像を生ずる傾向が作られた時に正常な外界の覺官的刺激でも來るといふと、茲に錯覺は起るのである。此際一方には覺官的刺激の强度は增され、他方には知覺されたものが其質と形とに於て尤も異樣な狀態に變化せられるのである。例へば錯覺者は戸を叩く音をば雷の響と思つたり、風のさゝやきをば天の音樂と解したりするやうな者である。彼れに取つては雲とか岩とか樹木とかは奇異な形に見え、そこらを通過する所の人間は彼れを睨み付けたり又はしかみづらを爲したりするやうに思はれ、其談話は自已を誹謗する言のやうに聞こえるのである。而して外界の覺官的印象にして若しも茫漠不定であるならば、想像力は尤も自由に活動するのである。健全正常な精神を有するものと雖も其想像力を以て漠々たる雲の狀や遠山の不規則に重なつて居る有樣や又突兀たる岩などを種々の形に解するに徴しても知るべきである。之と同一の理由からしてすべて夜間といふものは錯覺の起り易い時である。平素幽靈のある事を信ずるものは暗夜に石や樹木の切株をば幽靈と認めたり、木の葉のがさ〳〵いふ音をば悲しい泣き聲と信じたりするのである。此の如くなるに就ても幻覺の場合に於けると同樣に。感情の如何が大に影響を及ぼすといふ事を忘れてはならぬ。夜間に錯覺を起すものは感情の沈下した臆病者に限つて居る。思慮深い者の目や耳には錯覺などは決して起らない。又兼々聯想して居る事も影響を及ぼすのである。例へば何れの國に於ても幽靈を信ずるものは最近に死んだ人を夜間暗い所で見るのである。

（未完）

露西亞及露西亞人

廣瀨哲士

近世歐羅巴の四大强國といへば英吉利、佛蘭西獨逸、露西亞を指すことは何人も拒まないところである。然るに此四つの國名を檢べて見ると一樣にノルマン人の名から出て居ることに氣が付く。まづ英吉利はアングルの名より來り、佛蘭西はフランクの名より出で獨逸（アルマーニュ）はアルマンの名から來て居り、今自分がこゝに說かうと思ふ露西亞はルスの名から來て居る。

偖其露西亞なる名の由て來るところを今少し悉しく調べて見ると先づ順序として最も此國に親しいリユーリックの名に遡らなければならぬ。此リユーリックはその昔ゴス人と共に西班牙にまで侵入したリユードリックと同樣に即ち佛蘭西でいふロドリグと同樣にノルマンの名である。此リユーリックが首領になつて一隊の人々と共に今の所謂ノヴゴロッド地方に移住し此地方一體を故鄕の名に因みて露西亞と呼ぶやうになつたのである。一體芬人やスラヴ人はスカンヂナヴヤを指してルスと呼むで居たのである。

如何なる事情の下にまた如何なる理由によつて彼等がノヴゴロッドの地方に移住するやうになつたかは一應研究する必要があるけれども少時後廻しにしてさて一國の國民性が形成せられる主因と看做す可き事には其國民の人種が如何なる種類のものであるかゞ第一に數ふ可きであらう。固より氣候風土も大なる影響を與ふるには違が無いけれども到底前者に及ぶ可くも無い。それから其國民の社會の道德や宗敎の及ぼす影響が甚だ重要視す

可きことであることは誰しも異存無いところであらう。

氣候及び土地が人に影響することは何人も知つて居ることで寒冷の氣候は人に抵抗力を增加させるといふ事も屢々耳にすることである。併し寒冷も度を超すと却て人を萎縮させる傾向が現はれて其結果何も爲ないやうになる。露西亞は此邊の事情を幾分說明して居る。また此國は地圖で見ても知れる通り實に廣漠たる單調未開の土地が多いのであるが往古は殊に其程度が烈しかつたところから其風が自然人間の精神にも影響を及ぼして漂泊的氣質を生ずるやうになつたに違無い。そして餘りに土地が渺漠たるところから限界的の一州一國の觀念が極めて弱く往古は全く無政府の狀態であつた。此限界が無く從つて一地方的觀念に乏しいことは同時に同化力の旺なることを說明するもので卽ち國家として一元的の傾向を說明する。かの無比の獨裁君主が現はれたのも偶然で無いとおもはれる。それは偖措き此國のコントラストの非常に甚しきことは著しいことで米國の如く「廣大」にして「豐富」といふのでは無く「廣漠」にして「貧窮」といふが如き其一例である。由來人間の想像の力は感覺の鋭敏に基くとともに其感覺を働かせる外界の事情によつて發達の度が違ふ。然るに露西亞はあの通り平坦で何も無く運動の急速なるものが一つも無く山も無ければ海も無く感覺を刺戟し興奮させるものが全く無いといふ天地であることは何うしても之が其人民にも影響せずには居らぬ。また此地の特色として忘れられないことは數百年の間此地の住民は村から村へと漂泊し一所不住の生活であつたが爲に都市を形ることが無く從て分業の生活を營むこと無しに原始的生活に日を送つて居たことである。

以上のことは專ら風土より見た話であるが次に國民性を形成する上に第一に重要視す可き人種と廣頭褐色の民とが結合して所謂露國型なるものが出來たのであるといふ大體論は動かすことが出來無いけれども更に委しき點に立ち入ると諸家の說が區々である。第一に所謂スラヴ人は自ら最も純粹の血液を有して居る種族だと自認して居る。そして自分達がアリヤンの血液を享けた最も純粹なものだと自認して居るが其實は全く反對でアリヤンの血より寧ろ芬人及モゴル人の成分が多量である。現今の露國は實に四十有六の異人種を包含して居り其大部分はアリヤン民族で無い。人は通常スラヴ人なる言葉を濫用するけれども之には人類學的意味と歷史的意味とがあつて混亂を招き易いのである。人類學者がセルトスラヴ人といふのはブラキセフアール族を指していふので現今のセルトスラヴ人のことであるが老歷史家のセルト人スラヴ人といふのはドリコブロンド種族のことである。今日通常スラヴ人といへば極めて幼稚な原始的の人民を指すのであるがまた之に新と舊とを區別することが出來る。

前にもアリヤン人種云々のことを少し叙べたが實際アリヤン族とスラヴ人とは親密な關係があるのであらうか。啻に彼等の使用する言語が同一系統の言語卽印度歐羅巴の言語であるとしても之れを以て直ちにスラヴを以てアリヤンなりと云ふことは出來ないのに況して其言語の一部にウラルアルタイ系統の言語が發見せられるのであるから猶更此間に疑が生じて來る。要するに露西亞は各種の人種が雜居して居た形跡は各種の遺物によりて證明せられるが其分布の狀は明白でない只一つ露西亞帝國の眞の建設者たるノヴゴロッド人の型はドリコセフアールであることだけは略確かなものゝやうである。併し中世以後今日迄の大露西亞にはブラキセフアールが過半を占めて居るから所謂現代のスラヴ人はブラキセフアールのものと見て差支が無い。卽ち彼等は當初西南から來て現時稱する露西亞の版圖內に勢力を逞しうし北方から來て居た人種を驅逐したのである。今のスラヴ人はセルト人と區別しにくゝなつて居るが頭蓋骨は長卵形で少し方形をし小さく頭髮は黑く顴骨秀で眼は褐色である。

本文の初に述べた如くスカンヂナヴヤからリユーリツクの一隊がノヴゴロッドに來て新しい帝國を建設はしたものゝ彼等の人種のみによつて國が出來たのでは無く從來此地に住した芬人が其臣下となつたのであるから芬人は西南から來たスラヴ人と共に此國の最も主要なる分子なることは云ふ迄も無い。それであるから此芬人の性質を究めれば同時に露人の性質を一部説明することにならう

古代の芬蘭人は古代のスラヴ人同樣に座居の民でまた主として農業に從事した民である。餘程スラヴ人と古代から類似して居たものと見えて古い書物には此兩者を混同して居る。亞細亞的なることは芬人の方が甚しい位で通常頭は廣く短く顏は扁平で顴骨高く眼は小さく而かもやゝ斜に附き鼻は高いよりも廣く口は大きく唇が厚い。身長も低く從つて脚が短くて弱かつた。古代の民謠によれば彼等の眼が黑く頭髮も黑く皮膚の色も褐色であつたらしいのに今日彼等の中に金髮碧眼の人のあるのは全く此地方に居住したノルマン人や日耳曼人との雜婚から生じたのに定まつて居る。此芬人の鄕土芬蘭は湖水の非常に多い所で氣候も非常に寒く平均溫度は攝氏の二度五分で七月の平均溫度が十七度一月の平均溫度は零下十二度九分乃至六度七分位である。一年中只夏と冬とがある許りなることは北極に近い土地の例である。斯樣な氣候とあのやうな土地とに對して斷えず奮鬪して居る人民の性質は到底南方溫暖なる地方人の性質と同じになることは出來ない。懷しいと見る太陽の光も矢のやうに飛び去つて直ちに暗黑の中に消えてしまふ。斯樣な事情の下に生活して居る芬人は勢悲觀に傾き天命を嚴重に奉じて決して之に抵抗する風などは無く眞面目で且嚴格である。一般に堅忍の性質ではあるが其忍耐は受動的で困苦に耐えることは卽ち運命に身を委ねたといふ風である。快活の點は殆ど無く只茫然として精神の作用が極めて遲鈍である。自然危難に際した時は沈着である。滅多に怒ることは無いが一度憤を發すると全く抑制することの出來ない程に烈しいことがある

同樣に沈默であるけれど時に發作的に多辯のことがある。保守的の性情と共に義務服從の觀念發達し而かも自由を愛することを忘れずまた正直である。あまりに謙讓の態度を持するから忸れ親しむことは六ヶしくはあるが友として賴母しい方である。一體に儉約な眞摯忍耐の人民で瑞典の支配から移つて露西亞になつた以後奴隸的に取扱はれるやうになつたが併し今も尙多くの觀察者は芬蘭人を道德及勇氣の點から云へば歐洲第一に位するものだと云つて居る。

ノルマン人の移入により屈服せしめられたるは右に述べた芬人許りで無い、古代スラヴ人も亦彼等に屈服させられたのである。此往時のスラヴ人は活動に乏しい漂浪の民で矢張り農耕を事とし座居の民であつた。彼等は一地方から他の地方へと轉々して居たけれども征服した土地に移るといふのでは無い。無人の境に移るので決して彼等は戰爭に長けたものでは無かつた。假令戰をしても部落同志の戰爭で首長の權威を認めることは知らず訓練や階級には無頓著で寧ろ無政府的精神であつた。其れであるから遠征等は更に企てやうとせず安閑たる農夫で他から攻擊を受ければ要塞城廓の陰に潛むで身を全うするのが例であつた。

スラヴ人は自分で一向商業を營まなかつたと見え行旅の商人に對して客人といひ公道を指して客人の道路と稱して居たことに徵しても其の事が知られる。要するに此スラヴ人も當時は自由な家族を營むで上より來る命令の形式を厭ひ自由を愛し無政府的狀態を喜むで居た。

此無政府狀態が可成り長い間引續いたところから上著のスラヴ人も次第次第に之に嫌厭の情を生じて來て遂に秩序的生活を營まむが爲にスカンヂナヴヤのルス人を招いたのであるといふ説が或人によりて主張されてゐるけれども此の事は俄かに信憑の難い説である。只此言葉にも幾分か象徵的眞理は認められる。兎も角此ノルマン人は露西亞帝國に取りて數の上で重大なるものでは無く寧ろ歷史的意義の方が大きいのである。ノルマン人移

人以前の土著の人々はスラヴにしろ芬にしろ何れも自治の能力に缺け人の上に君臨するといふことは得意で無かつた。所が北方のノルマンはもつと意志の確乎した雄健の民であつたことは彼等が世界の上に及ぼした事業を以ても直ちに知ることが出來る。

此優勝の民が受動的で意志薄弱の人々の上に現はれて命令を行ふやうになつたのであるから乃ち露國の偉大を生じた原因は少數なれども優勝の此民にあるものと見るが至當である。

次に人種の上から云ふと韃靼人は此國に於て現今では大した勢力のあるものでは無い。併し教育風俗の點から見ると少からぬ影響がある。此人種が此地に君臨して居た時に支那の行政其他文治上の制度を輸入して露西亞の天地を治めたのである

其當時の支那の制度は到底此地從來の蠻法と比較す可き底のもので無く徵稅の方法等も甚だ進むで居たのである。だから一旦政治上に韃靼の勢力が失墜しても爾後の爲政者が全く其慣習から脫することが出來ないのである。

今迄略述した芬人スラヴ人ノルマン人及び韃靼人の他に此國の成分として重く見なければならぬものは日耳曼族であるが之は其特色影響を述べないでも可いとおもふから略して置く。

要するに重なる成分なる右の種族を査べて見るに案外露國は單一種族の國である。最も多數を占めて居る芬及スラヴは韃靼と共にブラキセファール種に屬し僅に少數なるノルマン及び日耳曼がドリコセファールなるに過ぎない。

右に述べたやうな人種から成立し且古い歷史をもつて來た今日の露西亞人の性質は如何なるものであらうかと檢べて見ると文明こそ未だ若けれ歷史の古いことは此國の民を沈著ならしめ何と無く落付いて居るやうにおもはせる。由來スラヴ人は快活であるけれども此露西亞のスラヴ人は幾分陰鬱の傾きがあるやうに見える。併し之は幾世紀と無く陰暗な天の下に生息した爲であらう。

同情の念は甚だ發達し社交的なことも殆ど生れ

乍らにして享けた性情の如くである。親密の情もよく其言葉に溢れて居るが餘り正直では無いからスラヴの農民は「時」の價を全く知らない。急ぐことは何の意味か少しも了解して居ないのである

商業其他の行爲に就ては充分注意を要する意志は熟慮した強固とは云へない。寧ろ衝動的で大に怠つた上で大に働くといふ風である。最も吾人に興味あることゝおもはれるのは彼等の人生觀である

現在の時間が卽ち彼等の生の全部である。彼等は未來の夢の爲に貴重なる現在を犧牲にしやうとは毫も思はない。殊に此現在主義を精神界にのみ限らず物質生活にも適用する。世人が露人の宿命と云つたり運命論者だと云ふのは事實此現在主義を指すのである。彼等は明日を懸念し懊惱したとて何の役に立つかとおもつて居る。到底現在の不幸を轉ずることは出來ない、明日が何の賴みにならうと思つて居る。天然の恩惠の薄い此國に於て始終天然の壓迫を受けて居る故に識らず知らず懶惰になり先見の明を失ふ。最少限の努力も厭になつて只管受動的に天命を俟つやうになつたのであらう。

スラヴ人は戰爭に出でゝ第一戰に勝つた例は殆ど絕無であるが併しまた終始敗戰のみにして了るものでは無い。敗けても運命だとおもつて決して意氣を沮喪させない。輕々しく將帥の信用を疑ふなどのことは殆ど無い。併し前にも云つた如く彼等の喜怒哀樂の情は極めて突飛なことが多く常規を以て律することが出來ない。有心が直ちに無心に變じ熱も直ちに冷となるといふ風なることは忘れてはならぬ。

露人の知能も大分感情等と同じ傾向がある。推理の樣式は直線的根本的で幾多の事情幾多の方面等は考へない。一面のみを觀て熟視した積りで居る。之は愚なるが故では無くして國民の性情が複雜を厭ふて單純を喜ぶからである。截然として明白な解決を好むことは此國にて有名なる虛無主義の主張にも認められる。

先きに說明した如くスラヴ人は同化力に富むで居りまた模倣の能力も發達して居るが獨創の才は乏しい。同化力の盛なことは今日の露西亞を形成する上に甚だ重大な役目をなし、また一方には現はれて國人の有名な社交性となつた。併し模倣の點よりして直ちに獨創の才の無いものと斷定するは早計であらう。何せかといふに露國は文明の程度非常に他より遲れて居るところから特に模倣が必要であつたのかも知れぬ。そして然る上で始めて發明獨創の力が表はれぬとも限らぬ。心理學の研究によると模倣は發明の支持として用ひられる能力と認められる。

順序として如何なる偉人が此國から生れたかを檢して見たいが不幸にして多くの偉人の名に出遭くはさない。カテリナ二世は獨逸の婦人である。彼得大帝は母系はスカンヂナヴヤより父系は獨逸出である。トルストイもまた日耳曼出でうる。斯樣に考へると純粹のスラヴより出た偉人は無いやうであるが併し未來は何うして未知數である。

シモンド、ド、シスモンヂの生涯

高橋誠一郎

（六）

シスモンヂは此ヴルチユーザに於ける田園生活の間に獨り靜かにタスカーの農業に關する處女作の筆を運び、自由國民の憲法に對する研索に其勞力を傾注し、而して又伊太利諸共和邦の美しい歷史の稿を起さんとして其用意を怠らなかつた。

シスモンヂの父は艦て再びジエニーヴに歸ることゝ爲つたので、此ヴルチユーザの小農圃監督の任を其子に委ねた。農圃は十三年間の約束で正直な農夫の一家に貸附けてある。土地の收穫は此の山間の小農圃の間に行はれつゝある慣習に從ひ、穀物のまゝ二つに分割せられて持主と農夫と雇人とにそれ〴〵生活資料を給することゝ爲るのである。年若い新主人は能ふ限りの力を以て農事に盡した。田園裡の勞働は孰れも彼が心意の活力を益々增加せしむるの因と爲つたのみならず、農業の研究は又偉大なる敎訓を彼の智性に與へて常に新しく常に變じ常に興味ある觀察の効果多き源泉とは爲つた。

彼の自由濶大な心は不毛の瘦野、荒廢した曠原及び沼澤を次第に增加せしめつゝある伊太利の暴主等を非難することを禁ずるとが出來なかつた。彼は曰ふ、神は折角人間に恩惠を與へても人が其利用方法を知らぬ時は再び之を奪ひ返すの常であると。更に眼を轉じて水渠の設備を觀た彼は、之と反對に感嘆の聲を禁じ得なかつた。濁流滔々として水勢矢の如くなる大河は此水渠に流を瀉かれて、海に押流す可き泥土を此所に蓄積し、自然に拋棄して置いたならば徒らに其河口を埋めて不健全な濕地たらしむ可き筈の者を變じて之を豐饒なる沃野に改造してゐるのである。此技術は伊太利及び近く佛蘭西に於て往々地表を一新せしむるの効果があつた、而して彼は此土地改造の技術を行ふた幾多の基督宗派の努力に對して深く感謝した。

タスカニーの農業に關する彼の著書(Tableau de l'Agriculture Toscane)が初めてジエニーヴに於て出版せられたのは一千八百〇一年のことである。此書に於ける彼の筆は全く描寫的說明的である。シスモンヂは此書に於てタスカニーに於ける農業家が勞働の狀態や慣習風俗を平和な筆に描いて生々とした繪畫を讀者の前に示してゐる。之を以て其後等しく彼の手にものせられた落寞荒凉にして而も貧擔重き羅馬の四隣なるカムパグナの光景と比較すると其筆致の雄健銳利にして其著色の暗澹幽陰なる實に好個の對照を爲してゐる。當時の彼は